

2021. 8. 8. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書17章5-10節
『もしも小さな信仰があるなら』

こういう話があります。ある人が夢で神の前に立ってこう聞きました。「神さま、あなたにとって百万年とはどれほどの長さですか」とすると神は「わずか一分間」と答えられました。「では、あなたにとって百万円とはどれほどのくらいですか」と重ねて尋ねると、「ただの一円」と、神は答えられました。そこでその人は「ああ、神さま、それならわたしに一円下さい」と頼みました。すると神は、「ほんの一分間、待っていなさい」と答えられました。

しかし、今朝与えられました聖書の言葉は、何も百万年の忍耐をしなさいというようなことを言っていないようです。まず、5節で「弟子」という普段使いの言葉が、あえてここでは「使徒」という言葉に置き換えられています。「使徒」とはアポストロイ、つまり文字通り使わされた人を意味します。主イエスから何か任務をもらった人々が「わたしどもの信仰をまして下さい」とお願いし、それに主イエスが答えて「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう」と言われたことから記事は始まっています。からし種というのは、当時知られていたものの中で一番小さなもののたとえです。信仰とはそのちっぽけなからし種ほどあれば十二分であると主イエスは言われるのです。

十六世紀末から江戸時代を通して日本ではキリシタン弾圧が起こりました。隠れキリシタンのあぶり出しのために使われた小道具が踏み絵というものです。この幼子イエスを抱いたマリヤ像を土足で踏みつければキリスト教を捨てたということになりました。ところがよく考えてみると当時のキリスト教の教義にもそんなことは謳われていません。つまり日本人が作った「からくり」なのです。為政者たちは「信仰が小さい者は転び(棄教)、信仰が大きい者は転ばない」と吹聴したのです。もともと踏み絵の効果などたかがしれているのです。要するに大物を捕らえたいのとキリシタン同志の連帯を崩すのが目的でした。「信仰が大きい」と自他共に認める中心人物は次々に捕縛されました。

主イエスは信仰とは大小を問う課題ではなく、質の問題であると語ります。それが7～9節のたとえ話です。ここでは、しもべが命じられたことを全部しても褒められははしないし、更に命じられたことを全部しても感謝もされない。それでもすべきことはするという話です。そして、同じようにあなたがたも結果の善し悪しにとらわれず、まずやるべきことをして、それからすべきことをしたに過ぎませんと言いなさい。つまり、そういう自分を培いなさいと言われます。人のために努力しても、喜ばれも感謝もされず、不満な気持ちになってしまう自分に信仰が足りないと弟子たちは思ったのではないのでしょうか。そういう弟子たちに主イエスはからし種一粒ほどの、あるかないか分からないほどの信仰があればそれで十分だ。大切なことはあなたの任務を負い続けることだ。人からのむくい(評価・感謝・賛同)を求めるなど言われたのではないのでしょうか。

桑の木が海に移るのは不可能が可能になることです。かたくなな自分が解きほぐされていくということです。そして、それを成すのは神ご自身です。もしも小さな信仰があるなら、事態は大きく変えられてゆくのです。